

平成 29 年 11 月 5 日
千葉木鷄クラブ
(387 回 例会)

「経世済民」

『春風を以って人に接し、秋霜を以って自らを肅（つつし）む』（佐藤一斎先生）
その意味は、「自己に厳しく、他人に優しく」と理解。『言志四録』

真の商い、自分が儲かれば相手も儲かる「自利利他」と言う。

福沢諭吉先生は「political economy」を「経済」と翻訳、「世を経（おさ）め、民を済（すく）う」。「経世済民」。

どなたでもいつでも歓迎の千葉木鷄クラブです。

皆様のお越しをお待ちしています。

記

1. 日 時 : 平成 29 年 11 月 28 日 (火)
PM 16 時 00 分 ~18 時 00 分
2. 場 所 : 千葉市生涯学習センター 小会議室 (3F)
電話 : 043-207-5811
<交通案内> JR 千葉駅東口から徒歩 8 分
3. 会 費 : 1000 円
4. 演 題 : 「経世済民」
5. 講 師 : 安岡正篤先生 (テープにて拝聴)
6. 内 容
 - (1) 幕末の三傑
熊沢 蕃山 : 江戸前期の陽明学者・岡山藩家老・中江藤樹に学ぶ
藤田 東湖 : 水戸藩主徳川斉昭を助けて藩政改革・尊攘派の指導者
横井 小楠 : 幕政改革・公武合体
 - (2) 自然と人生
 - (3) 日本的キリスト教

[千葉木鷄クラブ 代表兼事務局 丸島 忠夫 Email : marushima_t@snow.plala.or.jp](mailto:marushima_t@snow.plala.or.jp)
[Tel : 0475-25-1211](tel:0475-25-1211)

<参考資料>

古典的用法としての「経世済民」「経済」

[近世](#)以前の日本では、「経世済民」(あるいは経国済民)が一つの言葉として用いられることはあまりなく、「経国」「済民」などがそれぞれ別個に用いられることが多かったが、近世([江戸時代](#))になるとこれらを一つにまとめた「経世済民」(あるいは経済)が盛んに用いられるようになった。その背景には、[明末清初](#)の中国で発展した[考証学者](#)による「[経世致用の学](#)」の影響を受け、日本でも[儒学者](#)・[蘭学者](#)などによる同種の「[経世論](#)」(経世済民論)が流行したことが関わっている。この「経世論」の代表的著作の一つで日本で初めて「経済」の語を書名とした[太宰春台](#)『[経済録](#)』([18世紀](#)前半)は、「凡(およそ)天下國家を治むるを経済と云、世を経め民を済ふ義なり」としており^[3]、この頃の「経世済民(経済)の學」は今日でいう[経済学](#)のみならず[政治学](#)・[政策学](#)・[社会学](#)などきわめて広範な領域をカバーするものであった。

しかし江戸後期に入って次第に[貨幣経済](#)が浸透すると「経済」のなかでも「社会生活を営むのに必要な生産・消費・売買などの活動」という側面が強調されるようになっていった。[海保青陵](#)は、自著で専ら現在と同じ意味で用いており、これは「経済」という語の早い例である。ただ青陵によると、当時の大坂で「経済家」といえば、治政一般ではなく「金銀の事」に詳しい者を指したと言ひ、大坂商人の間では現代的な用法は既に常識的だったようだ^[4]。[19世紀](#)前半の[正司考祺](#)『[経済問答秘録](#)』に「今世間に貨殖興利を以て経済と云ふは謬なり」とあるように、(考祺は批判的に指摘しているものの)今日の用法に近い「経済」が普及していた^[5]。以上のような用法の変化は、[明](#)・[清代](#)の中国の俗語において、金銭・財務に関連する(古典的用法と異なる)用法が広まったことの影響とする[杉本つとむ](#)の見解^[6]もある。

economy の訳語としての「経済」の定着

[幕末期](#)になり、新たに交流が始まった[イギリス](#)などから[古典派経済学](#)の文献が輸入されるようになると、「経済」の語は新たに“economy”の訳語として用いられるようになるが、それにはいくつかの段階がある。まず、[1862年](#)(文久2年)に刊行された[堀達之助](#)らの『[英和对訳袖珍辞書](#)』では“economy”を「家事する、儉約する」とし、“political economy”(古典派経済学において「[経済学](#)」を意味する語)に「[経済学](#)」の訳語を与えている([西周](#)によると後者は[津田真道](#)の執筆)。ついで日本における最初の西洋経済学入門書として知られる[神田孝平](#)訳の『[経済小学](#)』([1867年](#)(慶応3年)刊)では「[経済学](#)」を「ポリチャーエコノミー」と読ませており、同年末に刊行された[福沢諭吉](#)の『[西洋事情 外篇](#)』巻の3でも同様の用法として「[経済学](#)」の語が見える(なお前年 [1866年](#)(慶応2年)刊の『[西洋事情 初篇](#)』巻の1には「[経済論](#)」の語がある)^[7]。

しかし「[経済\(学\)](#)」がエコノミーもしくはポリティカル・エコノミーの訳語として定着するには若干の問題があり、例えば西周は『[百学連環](#)』([1870年](#)(明治3年)刊)で、エコノミーとポリティカル・エコノミーの区別を重視して前者に「家政」、後者については国家の「活計」を意味するものであり、津田の訳語「[経済学](#)」では活計の意味を尽くしていないとして「[制産学](#)」の訳語を与えている。このように個人(もしくは企業)の家計・会計と国家規模の経済運営を分けて考える立場はしばらく影響力を持ち、後者については「[理財](#)」の訳語が用いられることもあり([1881年](#)刊『[哲学字彙](#)』では“economics”の訳語)明治初期の大学・専門学校の学科名としては「[理財学](#)」がしばしば用いられた。しかし国家レベルと個人・企業レベルのエコノミーを包括して「[経済](#)」とする用法が次第に普及することになり、現在に至っている^[8]。また江戸時代以来の「[貨殖興利](#)」という用法も存続したため、本来の「[経済](#)」の語に含まれていた「[民を済ふ](#)」という規範的な意味は稀薄となった。

また、この新しい用法は本来の意味の「[経済](#)」という語を生み出した中国([清](#))にも翻訳を通じて逆輸出され、以後東アジア文化圏全域で定着した。